

2021 年度（令和 3 年度）

事 業 報 告 書

－ 2022 年 6 月 17 日 －

公益財団法人国際高等研究所

事業報告書

— 目 次 —

I. 政府による緊急事態宣言を踏まえた法人運営及び事業活動の自粛	1
II. 研究所運営体制	2
III. 研究事業活動	2
『1』 月次会議	2
『2』 「自主研究」の推進	2
『3』 「受託研究」の展開	4
『4』 学術交流事業	6
『5』 けいはんな学研都市から拓げる交流事業	7
『6』 研究活動に係る成果の発信強化・広報活動の充実	12
IV. 法人運営	13
『1』 評議員会、理事会の開催状況	13
『2』 資産運用の取り組み	13
『3』 施設工事・修繕工事の実施	15
V. 2020 年度（令和 2 年度）財務・収支実績	15
『1』 貸借対照表	15
『2』 正味財産増減計算書	16

公益財団法人国際高等研究所 2021 年度（令和 3 年度）事業報告

国際高等研究所にあっては、2021 年度に松本紘所長の 2 期目のスタートを迎えた。

2021 年度は 2020 年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症の予期せぬ世界的蔓延（パンデミック）により、人類は未曾有の危機に直面しており、人類社会の持続可能性を揺るがしかねない様々な問題を惹起した。松本所長を中心とする新たな研究所体制の下、このような大きな社会課題、人類的課題に取り組むことが高等研に課せられた大きな責務であることを痛感した年となった。

I. 政府による緊急事態宣言を踏まえた法人運営及び事業活動の自粛

2020 年 2 月以降、全世界に拡散した新型コロナウイルス感染症は、我が国において大きな影を落とし、2020 年度は、高等研においても事業活動を自粛せざるを得ない状況に至ったなど、1 年間を通じて新型コロナ禍パンデミックの影響から逃れられない年となった。

2021 年度を迎え、新型コロナ禍は落ち着きを見せることなく、5 月～6 月頃をピークとする全国的な「第 4 波」に続き、インドでの感染力の強い変異株（デルタ株）の猛威が我が国においても伝搬し始めた。

新型コロナウイルスワクチンの接種が始まったものの、デルタ株の拡散の影響を受けて全国的な新型コロナ禍拡散状況は衰えを見せず、すでに適用されている東京都、沖縄県に加え、神奈川、千葉、埼玉の首都圏 3 県と大阪府に対して、8 月 2 日から 8 月 31 日までの期間、新型コロナウイルス特別措置法に基づく 4 回目の緊急事態宣言に続き、8 月 20 日から 9 月 12 日の期間で 5 回目の宣言が適用されるなど、「第 5 波」という厳しい新たな局面を迎えた。さらには、2022 年 1 月に入り、新たな変異株としてオミクロン株が南アフリカで確認されて以来、世界的に急激な拡がりを見せるようになり、我が国では現在「第 6 波」を迎え、終息に向かう気配を見せていない状況である。2022 年度に入り、4 月の段階での世界の累積感染者は 5 億 1 千万人（日本：770 万人）、死亡者も 620 万人（日本：2.9 万人）を超えた。

このような新型コロナ禍の拡散は、高等研における事業活動や法人運営にも大きな影響をもたらせた。政府による 3 回目の緊急事態宣言を受け、高等研では新型コロナウイルスによる感染予防および感染拡大防止と業務の継続を目的とする対応として、2021 年 4 月 26 日（月）～5 月 11 日（火）の期間、職員の 3 交代制勤務を実施したが、政府による 2 回の宣言継続表明を受け、この交代制勤務体制を 6 月 18 日（金）まで継続した。さらに、8 月 20 日（金）から 9 月 30 日（木）の期間、新たに当該宣言発出下の勤務体制で臨むこととなった。

研究活動を中心とする事業活動については、分野を越えた研究者が自由な立場で一堂に会し、討議することを旨とする高等研にあって、2020 年度に引き続き 2021 年度は、新型コロナ禍の影響を受け、多くの制約を受けて停滞を余儀なくされたが、そのような状況下にあっても、仮想空間に集う手法を駆使して、活動の可能性を探ったところでもある。

II. 研究所運営体制

第 120 回理事会（2021 年 3 月 2 日開催）において承認された「2021 年度の研究所運営体制」に基づき、2021 年 4 月以降、下記のと通りの暫定的な執行体制とした。

松本紘所長の再任（2021 年 4 月～2023 年 3 月）決議に併せて所長補佐職に係る付帯事項として、昨年度までの 3 名の副所長については副所長職を離れて「チーフ・リサーチ・フェロー（研究参与）」に就任いただき、基幹プログラムの研究代表者として研究活動に専念いただくこととした。従って 2021 年度においては副所長を置かないこととした。

III. 研究事業活動

『1』月次会議

高等研の研究事業を中心とする事業活動の進め方、個別事業の進捗状況の把握及び個別事業間の調整を協議・検討するため、所長、チーフ・リサーチ・フェロー、客員研究員及び事務スタッフによる月次会議を、原則毎月 1 回開催する計画である。

2021 年度を通じて、新型コロナウイルス感染症予防の観点から、その動向を注視しながら、開催した。

第 1 回月次会議：4 月 18 日（日） 3 密回避策を施して会議室開催

「今後の研究の進め方に関する意見交換」を中心に議論を進めた。

第 2 回月次会議：7 月 11 日（日）並びに 8 月 29 日（日）に会議開催を予定するも、新型コロナウイルス禍緊急事態宣言発出等の理由により、延期とした。

第 2 回月次会議：9 月 23 日（木） オンラインでの参加を認める等、3 密回避策を施して会議室開催

「今後の研究の進め方に関する意見交換」を中心に議論を進めた。

第 3 回月次会議：11 月 14 日（日） 3 密回避策を施して会議室開催。事業活動の進捗状況及び今後の活動計画について検討。

第 4 回月次会議：12 月 12 日（日） 3 密回避策を施して会議室開催。事業活動の進捗状況及び今後の活動について検討。

第 5 回月次会議：2022 年 2 月 6 日（日）開催を予定するも、都合により延期。

第 5 回月次会議：2022 年 3 月 13 日（日） オンライン併用により会議開催。

『2』「自主研究」の推進

1. 総括

現在、人類は持続的生存が脅かされる課題に直面し、生き方や価値観の転換までも問われている。こうした時代的、社会的背景に由来する地球規模の課題にどう対処していくのか。人類の未来と幸福に向けた学問、科学技術、社会はどのようなものなのか。研究事業では、こうした課題に対峙し、人間を強く意識し人々の生活と密接に関わりながら、これからの学術研究や社会に適する方向、概念、実践の創出に向けた活動を行う。2020 年度にそれ

までの基幹プログラムが終了したことから、2021年度は、過去の蓄積を踏まえ新たな3基幹プログラムを検討、発足した。そして、高等研の特徴である **Beyond Boundaries** の方法と精神に基づき、新規基幹プログラムの推進に努めた。

2. 基幹プログラム

高等研の理念や特徴、時代的社会的背景の考察、これまでの研究活動、けいはんな学研都市地域における高等研の役割等を踏まえ、以下の3基幹プログラムを発足、推進した。

なお、当該基幹プログラムの活動状況については、付属明細書1を参照のこと。

(1) 変化の時代に“何を研究するかを研究する”方法の予備的探索

— 学問知識のメタ分析とデザイン —

代表者：有本 建男 国際高等研究所チーフリサーチフェロー

政策研究大学院大学客員教授

科学技術振興機構研究開発戦略センター上席フェロー

内 容： 高等研の理念の今日的解釈と関連知見の取得を行う。**Transdisciplinary**（学際共創）、**Knowledge Synthesis**（知の統合・構造化）という学術動向の中で、学問知識の認識の構造と方法の変化について考察し、何を研究するかを研究する方法を試行実施する。

(2) なぜ今「脱炭素」のうねりなのか

代表者：佐和 隆光 国際高等研究所チーフリサーチフェロー

京都大学名誉教授

内 容：わが国のエネルギー環境政策に係るパラダイム・シフトの構造や社会経済的インパクトを明らかにし、今後を展望する。その際、歴史主義的考察、政治経済学的考察、社会学的考察、技術開発予測等を踏まえ、整合性ある解釈と展望を描く。

(3) 教育を基軸とした住民参加型地域振興

代表者：高見茂 国際高等研究所チーフリサーチフェロー

京都光華女子大学学長

京都大学学際融合教育研究推進センター特任教授

1) けいはんな学研都市地域を軸とした教育システム輸出拠点の形成 ※継続課題

内 容： 2020年度発行の報告書における諸外国の教育制度やオフショア・オンショアスクールの世界的動向を踏まえ、教育システム輸出入拠点の形成に向けた課題や視点を考えると共に、国際教育都市としての「けいはんな」の可能性を考察した。

2) けいはんな学研都市地域の振興に向けた具体的試み

— ヘルスリテラシー向上を通して —（第2期）

内 容：けいはんな学研都市地域での社会実装と健康創出促進好循環モデルの形成を目指し、当該地域の住民や初等・中等教育機関等を対象にしたヘルスリテラシー向上策を提案する。その際、ヘルスリテラシーの測定手法、既存の行動変容手法の応用を検討する。

3. 研究企画推進会議

本会議は、研究活動に係る諸課題に関する所長の諮問に応じた検討、所長への建議あるいは助言・提案、研究事業の企画及び円滑な推進を図るために必要な事項を検討するものである。2015年度に発足、一期2年とする。2021年度は第四期をスタートさせた。尚、新型コロナウイルス感染症の影響により、対面での議論を重視する本会議の趣旨に鑑み、開催を見送った。

なお、当該研究企画運営会議の委員構成等については、付属明細書1を参照のこと。

『3』「受託研究」の展開

高等研のこれまでの自主研究による研究活動の成果の蓄積や、大学や研究機関及び研究者のネットワークなど学術研究機関としての高度な機能を活かし、社会からの要請に応える観点から、行政や他の研究機関及び産業界（企業）との間で、公益性を担保する受託研究を受け入れることは、高等研の社会との関係性を強化する一助となり得るという認識は変わるものではない。公益法人としての役割・使命に鑑み、広く社会との関係性を担保する事業化を図る。

(1) 京都府「けいはんな学研都市・文化力強化事業」に係る受託研究

(2021年度継続事業)

2017年度から始まった「日本文化創出を考える研究会」では、日本文化とは何かを考えるにあたり、日本文化の発祥の地である京都の文化と歴史について考察してきた。

2021年度の計画及び事業展開については、前年度までに整理された内容を踏まえ、日本文化の活用について下記のような検討を進めることとした。

○新型コロナ禍での社会文化状況を考察し、新しい生活様式を模索する上で、文化の本質、人間にとっての文化の必要性、コミュニティにおける人間の幸福感、心のつながりを検討し、文化の新しい活用方法を提案する。

○京都地域全体をミュージアムとして、博物館や美術館を訪れるかのような視点から京都の文化を楽しめるような構想を検討する。

これらの視点に基づき、京都から世界に発信する日本の文化力について考えるとする観点で事業を推進することとした。そのために、京都府の関連部署、けいはんな地区の自治体、文化活動団体などとの連携も視野に入れたものとした。

活動実績：

2021年度実施計画を策定し、京都府に対して4月22日に2021年度補助金申請を行った。年間5回の会合を開催し、活動実績は下記の通り。

第1回（通算21回）研究会：7月27日（火）於京都高度技術研究所

※6月15日（火）に開催予定だったが、緊急事態宣言発出により延期した。

第2回（通算22回）研究会：10月12日（金）於京都高度技術研究所

※9月27日（月）に開催予定だったが、緊急事態宣言発出により延期した。

第3回（通算23回）研究会：10月29日（金）於京都府公館

同日に、京都スマートシティエキスポ 2021 における特別企画として配信される、国際高等研究所「日本文化創出を考える」研究会パネルディスカッションの収録を行った。

第4回（通算24回）研究会：12月7日（火）於京都高度技術研究所

第5回（通算25回）研究会：2022年3月3日（木）於キャンパスプラザ京都

2022年3月に2021年度報告書を取りまとめ、京都府に提出した。当該受託事業は、2021年度を以って終了した。

（2）産業界からの受託研究

受託先：タツタ電線株式会社

テーマ：「5G時代における電磁波の利活用」

AI、IoT、ビッグデータ等、科学技術の飛躍的な進化と同様に、今もっとも注目される「第5世代移動通信システム（5G）」は、超高速大容量化・超多数端末接続・超高信頼低遅延通信という新たな特徴が備わることにより、その適用範囲が飛躍的に増え、すべてのものがネットに繋がる IoE（Internet of Everything）の世界を加速させている。5G時代において、これまで以上に多くの製品やサービスに囲まれる環境となるが、5G時代における社会のあり様について、様々な角度から検討し、「5Gと共存する社会像」を能動的に訴求する。

本年度上期にて事業の終了を予定していたが、新型コロナ禍により、前年度に引き続き調査対象へのヒアリングが実施できない状況となった。委託者の意向を踏まえて、契約延長期間を2022年3月31日まで再延長してヒアリングを実施した。

① 通信手段としての電磁波の利活用について

2020年7月20日

同志社大学理工学部電子工学科通信方式研究室 岩井誠人教授

2020年8月27日

京都大学大学院情報学研究科 原田博司教授

2022年1月14日

情報通信研究機構（NICT）ネットワーク研究所ワイヤレスネットワーク

研究センターワイヤレスシステム研究室（横須賀）松村武室長

② エネルギーの伝送手段としての電磁波の利活用について

2020年10月22日

京大大学生存圏研究所生存圏電波応用分野 篠原真毅教授

2021年11月26日

金沢工業大学工学部電子情報通信工学科 伊東健治教授

③ 探査手段としての（レーダーとして）電磁波の利活用について

2021年12月24日

情報通信研究機構（NICT）テラヘルツ研究センター

Beyond5G 研究開発推進ユニット ユニット長（小金井）實迫巖センター長

④ 電磁波の生命に対する影響について

2020 年 10 月 22 日

京都大学生存圏研究所生存圏電波応用分野 宮越順二特任教授

⑤ 電磁波の特性による利活用について

2020 年 11 月 25 日

三重大学大学院生物資源学研究科 橋本篤教授

2021 年度内に本事業として計画した 8 件のヒアリングを全て終え、各ヒアリングの報告書を全て提出し、受諾された。今後、全体報告書をまとめて提出し、受託先に対する報告会を 2022 年 5 月 27 日に開催することを決定した。

『4』学術交流事業

1. 『集合知ネットワーク』（きづ会議）構築プロジェクト」（2021 年度継続事業）

代表者：駒井 章治 国際高等研究所客員研究員

東京国際工科専門職大学工科学部情報工学科教授

21 世紀となり、新型コロナウイルス感染症や降雨災害、震災、ウクライナ侵攻など、世界各国において予想できないような事象が絶え間ない形で起こり続けてきている。IT 技術の発達に伴い、社会の多様化も極度に進み、社会の在り方の変化のスピードもヒトの脳力を超えたものとなっている。こういった現状を踏まえ、質の高い情報をスピード感を持って活用していくために、常に様々な事象に対して積極的な態度で議論し、思考しておくことにより「構え」をとっておくことが有用である。本活動は「何を研究するかを研究する」研究所として行うべき活動を行い、近い将来国際高等研究所が執るべき活動の在り方を示すことを目的とする。

なお、当該学術交流事業のメンバー構成等については、付属明細書 2 を参照のこと。

活動実績：

本企画では、様々な分野や経験の違いを越えて「知識の交流」を行い、その醸成から新たな「智の創発」を生み出し得る「智の原始スープ」を構築し、集う者全てが平易で議論し、知識を交流させ、アップグレードさせるとともに、「人として交流できる場」を提供するもので、2019 年度から新たな事業として取り組んでいる。

2021 年度も、各方面の研究者を対面やオンラインで招集して 10 回の研究会を開催して、今後必要と考えられるテーマについて議論を深めた。

第 1 回（通算第 20 回）研究会：4 月 27 日（火）竹村仁美（一橋大）「国際関係法」

第 2 回（通算第 21 回）研究会：5 月 25 日（火）田中由浩（名工大）「触覚」

第 3 回（通算第 22 回）研究会：6 月 29 日（火）久木田水生（名大）「AI 倫理」

第 4 回（通算第 23 回）研究会：9 月 7 日（火）塩尻かおり（龍谷大）「植物の化学情報」

第 5 回（通算第 24 回）研究会：10 月 5 日（火）中谷日出（CUBE、京大）

「アカデミアとメディア」

第 6 回（通算第 25 回）研究会：11 月 2 日（火）池永朱里（アーティスト）「離島アート」

第 7 回（通算第 26 回）研究会：12 月 7 日（火）森田泰暢（福岡大）「市民が研究する場」

第 8 回（通算第 27 回）研究会：1 月 11 日（火）津村啓介（前衆議院議員）「科学と政治」

第 9 回（通算第 28 回）研究会：2 月 1 日（火）五十嵐涼介（株式会社 AaaS Bridge）
「知と社会を繋げる」

第 10 回（通算第 29 回）研究会：3 月 1 日（火）杉谷和哉（岩手大）「公共政治」

『5』 けいはんな学研都市から拡げる交流事業

（当該交流事業の活動状況に係る補足事項については、付属明細書 2 を参照）

1. エジソンの会

2016 年 6 月のエジソンの会発足以来、過去 36 回（2020 年度末）の会合を開催してきた。2019 年度からは、未来社会の在り方を想定して、そこから見出される科学・技術・社会の相互作用の重要性を踏まえ、そのための「ネットワーク構築」と「協業を生むための土壌づくり」に主眼をおいた活動を実施している。2019 年度は、我々の生活や社会に大きな影響をもたらすと思われる分野・技術に焦点を当ててご講演いただき、未来に向けて取り組むべき研究対象や技術開発対象は何かを考察した。2020 年度は、前年に引き続き、サイエンスの進歩とそれによるテクノロジーの発展を踏まえて、未来社会の在り方を想定して未来を考える会合を実施した。

<2021 年度の取り組み>

2020 年度は、新型コロナウイルス禍の影響により活動が制限されたため、2 回の開催に止まった。2021 年度は、前年度に引き続き「未来に向けて取り組むべき研究開発」を年間テーマとして、オープン・セミナーの開催を予定した。コロナ禍の影響で 2020 年度から情報交換会を中止しているが、本年度も再開出来なかった。著名な講師と対話できる情報交換会は参加者にとって大きなメリットであるため、2022 年はコロナ禍の状況を考慮しつつ再開を検討する予定である。

1) オープンセミナーの開催

「未来に向けて取り組むべき研究開発」を年間テーマとして、「未来社会における科学技術の在り方や人文社会系の問題」を取り上げ、そこで重要となる分野と技術に焦点を当てて、オープンセミナーを企画した。

活動実績：

原則として年間 5 回の会合を予定していたが、新型コロナ禍の収束が見通せず、緊急事態宣言が発出されている期間の活動については自粛せざるを得ない状況であったため、上半期の活動は実績なし。第 3 四半期より活動を再開し、2 回開催した。

第 37 回：11 月 19 日（金）国際高等研究所レクチャーホール

テーマ 『バイオサイエンスが切り拓く未来』

講演 「バイオハイブリッドによる挑戦

～ロボット、センサ、培養肉、人工細胞、マイクロ流体デバイス～」

講師：竹内昌治

東京大学大学院情報理工学系研究科知能機械情報学専攻教授

講演 「培養細胞により世界を変える ～体を模倣した革新的培養技術～」

講師：川島一公 インテグリカルチャー株式会社 取締役 CTO

インタラクティブ・セッション

登壇者：竹内昌治氏、川島一公氏、上田修功氏(スーパーバイザー)

第38回：2022年3月2日(水) 国際高等研究所レクチャーホール

テーマ：『人と機械の未来 ～ムーンショット型研究開発によるアプローチ～』

講演：「ムーンショット型研究開発によるアプローチ

～自ら学習・行動し、人と共生するロボットの実現に向けて～」

講師：福田敏男先生 名古屋大学名誉教授 名城大学教授

早稲田大学特命教授

講演：「身体と機械の融合による人類の可能性の最大化」

講師：粕谷昌宏 株式会社メルティン MMI 代表取締役

インタラクティブ・セッション

登壇者：福田敏男氏、粕谷昌宏氏、上田修功氏(スーパーバイザー)

2. ゲーテの会

けいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」は、2013年8月に有志の企画で発足し、2013年12月開催の第5回から高等研の正式な交流事業と位置付けて原則として毎月開催している。2021年度末までに90回の開催実績を重ねるに至っており、高等研が関西文化学術研究都市の中核機関として、相互の連携や知的活動、さらには参加者相互の人脈構築や交流の中心的役割を担うという「知的ハブ」機能を果たせるものに育て上げてきたと言える。

2021年度は、コロナ禍での新しい運営方式として、webinarを利用したライブ配信により、講演に加えて双方向の質疑応答を実現し、6回の会合を開催した。感染状況を鑑みながら、第89回からはオンライン参加・会場参加のハイブリッド開催とした。オンラインでの参加が定着してきたことを受けて、ポストコロナ禍におけるゲーテの会の持続的な運営の在り方を検討して、来年度からは新たな形で展開する予定である。

1) ゲーテの会運営

2021年度活動実績は下記のとおり。

第85回：5月26日(水) オンライン開催

分野：思想・文学分野

テーマ：日本人の実像を求めて旅した民族学の祖「柳田国男」

講師：鶴見 太郎 早稲田大学文学部教授

第86回：6月25日(金) オンライン開催

分野：科学・技術分野

テーマ：フロイトと並ぶ深層心理学の開拓者「ユング」

講師：森谷 寛之 京都文京大学名誉教授

第87回：7月20日(火) オンライン開催

分野：思想・文学分野

テーマ：「伊藤整」の西欧文学文化受容の姿勢

講 師：澤井 繁男 作家、元関西大学文学部教授

第 88 回：9 月 16 日（木）オンライン開催

分 野：思想・文学分野

テーマ：手塚治虫と「メタモルフォーゼ」

—『ファウスト』『メトロポリス』から「人工生命体」への地平へ—

講 師：村瀬 学 同志社女子大学名誉教授

第 89 回：2022 年 1 月 21 日（金）オンライン参加・会場参加並行開催

分 野：思想・文学分野

テーマ：保田與重郎「絶対平和論」への軌跡

講 師：前田 雅之 明星大学人文学部教授

なお、この回よりオンライン参加者から参加費の徴収を試行実施した。

第 90 回：2022 年 2 月 17 日（木）オンライン参加・会場参加並行開催

分 野：科学・技術分野

テーマ：世界的数学者にして教育者、随筆家。人間と学問の在り方を論じる「岡潔」

講 師：高瀬 正仁 数学者・数学史家

2) 公開事業に関連するイベントの動画配信

2020 年度において新たな試みとして、ゲーテの会の講師へのインタビューを録画して YouTube の高等研チャンネルを通じて配信する「ショートインタビュー動画配信」を第 82 回ゲーテの会より試行的に実施し、好評を得ている。2021 年度においても高等研からの情報発信の一つの事業コンテンツとして定着を図るべく取り組むこととした。

2021 年度における YouTube 高等研チャンネルへの配信実績は下記のとおり。

- ・国際高等研究所メッセージ# 6：6 月 25 日（金）公開
鶴見太郎先生「私は、柳田国男をどのように学んだか。」
- ・国際高等研究所メッセージ# 7：7 月 16 日（金）公開
森谷寛之先生「私は、ユングをどのように学んだか。」
- ・国際高等研究所メッセージ# 8：8 月 20 日（金）公開
澤井繁男先生「私は、伊藤整をどのように学んだか。」
- ・国際高等研究所メッセージ# 9：10 月 11 日（月）公開
村瀬学先生「私は、手塚治虫をどのように学んだか。」
- ・国際高等研究所メッセージ# 10：2022 年 2 月 15 日（火）公開
前田雅之先生「私は、保田與重郎をどのように学んだか。」
- ・国際高等研究所メッセージ# 11：2022 年 3 月 30 日（水）公開
高瀬正仁先生「私は、岡潔をどのように学んだか。」

3) 『新しい文明』の萌芽探求プロジェクトによる事業企画機能の持続性確保

高等研として事業の継続性を踏まえた事業企画及び計画機能を強化し、組織として対応できるように持続可能な事業推進体制の整備及びその構築を図る。2020 年度において試行的に実施した『新しい文明』の萌芽探求プロジェクトに繋げる所内準備会合の検

討内容を精査して、2021 年度から本格的な事業展開が図れるように取り組むこととした。

2021 年度は、本プロジェクトを軸とする交流事業の構造化を図る観点で企画立案を行った。その結果、これまで実施してきた「ゲーテの会」、「市民参画シンポジウム」を再編して、問題の提起から社会への還元までを完結させる＜「新たな文明」の萌芽、探求を！＞と題するシリーズ構成の事業を展開することとした。2022 年度以降に本プロジェクトを開始する予定である。

3. 特別企画：市民共同参画シンポジウム「ILAS 哲学と先端科学の対話シリーズ」

(ゲーテの会、エジソンの会連携特別企画)

長年の実績を有するゲーテの会とエジソンの会の連携を図り、人文社会系と科学技術系の知の融合を目指す市民共同参画企画を 2019 年度から開始した。全 4 回のシリーズを計画し、2019 年度第 1 回に続き、2020 年度は第 2 回会合を実施した。

第 1 回会合では、参加者の声を反映し、且つ講演者と参加者とのコミュニケーションに重きを置き、World Café 形式を採用したが、第 2 回会合では、新型コロナウイルス禍の影響により募集人数を制限し、3 密を避けるためにグループ討議を割愛したため、会合の狙いである市民共同参画の目的が十分に果たせなかった。

2021 年度は 2 回の開催を計画していたが、本来の目的に沿った対面での開催が前提であったため、新型コロナ禍の影響を踏まえて今年度は開催を見送った。

本企画の継続に関して総合的に判断した結果、交流事業全体の事業推進体制を整備・構築する観点から、2022 年度からは、これまで実施してきた「ゲーテの会」「市民参画シンポジウム」を再編して、＜「新たな文明」の萌芽、探求を！＞と題するシリーズ構成の事業を展開する予定である。

4. ILAS 塾「ジュニアセミナー」

『独立自尊の志』養成プログラム「ILAS 塾ジュニアセミナー」については、2016 年3月の初回開催から毎年春夏の2回、2泊3日の日程で対面方式により開催してきたが、コロナ禍を考慮し、2020年夏季、春季は中止、2021年春季からは新たなスタイルで再開した。

2021年夏季においては、2021年春季に引き続きWEB「ILAS塾ジュニアセミナー」として開催した。運営の拡充に関しては、春季に引き続き次の5点の取組を進めるとともに、これらに加えて、ティーチングアシスタント (TA)の協力を得て、「オンラインプレミーティング」を実施し、受講生の問題意識の深耕を図り、当日のグループ討議のさらなる拡充を期した。

- ① 開催形態を対面方式からオンライン方式に変え、募集対象を関西地域から全国に広げたこと。
- ② 募集にあたって、高校生のみならず大学生にも参加を呼びかけ議論の多様化を期したこと。
- ③ 印刷教材のメインテキストの配布に加えて講義動画を配信し、オンデマンド学習を強調したこと。
- ④ 人物に学ぶシリーズに加えて、民主主義、原子力開発などの現代的課題を取り上げ、

課題探求型プログラムを導入したこと。

- ⑤ 論理（理性）主体のグループ討議のみでなく、感性（芸術性）をも鍛える「WEB句会」を企画し、全人教育に配慮したこと。

2021年度のジュニアセミナーについては、従来の合宿滞在型方式とオンライン方式のメリット、デメリットを検証し、恒常的な運営方針及び、定常的な実施方式の確立が図れるように取り組むこととした。

（1）2021年夏季ジュニアセミナー ―体験型・課題探求型―

2021年8月開催の夏季ジュニアセミナーは、新型コロナ禍が収束していない状況に鑑み、オンライン方式による実施方法を採用して実施した。募集対象地域を広げ、リモート（遠隔）によるWEB学習プログラムとした。

開催は2021年8月3日（火）～4日（水）として2日間に短縮して実施した。受講生は受講経験者の大学生5名、高校生29名の合計34名であった。今回はオンライン開催の特性を生かし、高校では長野県上田市や兵庫県姫路市から、大学では北海道大学、早稲田大学等、近隣府県を越えた受講応募があった。受講内容は下記のとおり。

① 思想・文学分野

言語認識を対象とする「松尾芭蕉」の世界を探求する。～古池に蛙は飛び込んだか 松尾芭蕉の名句の真相～」をテーマに、長谷川 權氏（俳人）を講師とした。受講生及びTA、43人からの投句86句を対象に選句した結果を基に、長谷川先生の指導の下で「WEB句会」を行った。

② 政治・経済分野

民主主義を対象に「民主主義の現代的意義を考える～公共政策規範としての「将来世代に対する責任」～」をテーマに、足立 幸男氏（京都大学名誉教授）を講師とした。足立先生の講義内容やグループ討議を通して、政治参加の権利と義務、民主主義国家と権威主義国家など、政治や国家の在り方について議論された。

③ 科学・技術分野

原子力開発を対象に「原子力開発の過去・現在を考える～日本の「原子力開発」を推進した人々の構想力～」をテーマに、山崎 正勝氏（東京工業大学名誉教授）を講師とした。山崎先生の講義内容やグループ討議を通して、エネルギー政策を再考する必要があるのではないかなど、自らの未来を見据えた真剣な議論が交わされた。

（2）2022年春季ジュニアセミナー ―人物学習型―

開催日程を2022年3月26日（土）～28日（月）の3日間、前回に引き続きWEB開催にて実施した。受講生は京都府、大阪府、奈良県、兵庫県、静岡県、東京都、岩手県、北海道に在住の20名（高校生15名、大学生5名）。

① 思想・文学分野

「九鬼周造に学ぶ～現代に息づく伝統的美意識としての「いき」～」をテーマに藤田正勝氏（京都大学名誉教授）を講師とした。

受講生自らが有する「いき」の感覚に関して、言葉としては理解できても、その

実態がつかめているか覚束ないものと捉え、「いき」とは、目的を持たないそれ自体を楽しむ（自律的遊戯）を本質とするなど、「いき」を巡って、その探究が続いた。

② 政治・経済分野

「吉野作造に学ぶ～先陣を切る者は、歴史に学び、その光と影を縁(よすが)とする～」をテーマに奈良岡聰智氏(京都大学法学部・法学研究科教授)を講師とした。現代は、以前にも増して「情報」が重要になってきており、国民の認識としての「情報」が自由と民主主義を保証する上で欠かせない要素となっている。ネット空間は国家統制の及ばないアナーキーな存在であるが、集合知の働く場として有用である。歴史を学ぶことは、多様なアイデンティティを有する人間にとって生きることと同義である。歴史的事実は、その背後の人間の強烈な意志と感性の存在が意味のあるものとして資料化され叙述されたものに他ならないなど、現下の世界情勢をも踏まえて歴史認識に関わった白熱した議論が交わされた。

③ 科学・技術分野

「司馬江漢に学ぶ～「文化」を創造する好奇心が豊かな人間に！～」をテーマに池内了氏（総合研究大学院大学名誉教授）を講師とした。近代科学技術の発展に関する西洋東洋の違いの要因についてや、理系と文系の思考の違いに関連して、前者が依拠する合理性・論理性の重要性、及び後者が依拠する感性・人間知の重要性など、未来を見据えた真剣な議論が交わされた。

(3) 外部資金獲得の取り組み

外部資金の獲得に取り組み、当該ジュニアセミナーの円滑な運営を図るため、日本の未来を創る人材の育成及び支援を標榜する「一般財団法人三菱みらい育成財団」に対して、当該財団の助成公募メニューに基づき、ジュニアセミナーへの助成を獲得すべく、助成金の応募申請を行ったところ、2021年6月8日付にて採択が決定し、7月1日付にて628万円（2021年度）の助成契約を締結した。本助成は、原則3年間受けることが可能である。

(4) 寄付募集の取り組み

2019年度より、公益財団法人京都地域創造基金が実施している事業指定育成プログラムに参加して寄付を募集している。毎年申請が必要で、本年度は「随時エントリーコース」に申し込んで承認されている。2021年度は、2022年3月末の時点で6件のご寄付をいただいております、寄付総額は23万6000円である。ジュニアセミナー受講生の保護者への働きかけが効果的であった。

『6』研究活動に係る成果の発信強化・広報活動の充実

1. 2021年度広報活動

(1) 2020年度版アニュアルレポートの発行

例年通り2020年度アニュアルレポートを2021年8月に発行した。発行に際しては、引

き続き、内容充実の一方で経費削減に繋がるように編集方法及び発行手法の見直しを図った。発行部数は2,000部、送付先は約1,400件。

2. 外部機関主催事業への積極的な参加

(1) 「京都スマートシティエキスポ2021」でのパネルディスカッション動画の配信

京都スマートシティエキスポ2021 が2021年11月11～12日に、完全オンライン形式で開催されることとなった。高等研は、京都府からの依頼を受け、2020年度から3年連続で特別企画として「日本文化創出を考える」研究会のメンバーによるパネルディスカッションを実施した。今回は、無観客でパネルディスカッションの様相を収録して、京都スマートシティエキスポ2021のHP上で動画配信する形で参加した。

特別企画・国際高等研究所「日本文化創出を考える」研究会

収録日時：10月29日（金）

場 所：京都府公館（府立府民ホール「アルティ」併設）

テーマ：「文化首都としての京都を考える ～未来社会 Society 5.0 に先行するスマートシティの文化基盤とは～」

動画配信：11月12日（金）から、12月末日までオンデマンド配信

2022年1月から、高等研YouTubeチャンネルにて公開中

IV. 法人運営

『1』評議員会、理事会の開催状況

2020年度から引き続き、2021年度においても新型コロナ禍の影響を考慮する観点から、評議員会及び理事会の一部について、定款に基づく決議の省略を行い開催した。

2021年度における評議員会及び理事会の開催実績は、下記のとおりである。

1. 評議員会の開催

第86回評議員会	2021年	6月	17日	(決議の省略)
第87回評議員会	2021年	7月	14日	(決議の省略)
第88回評議員会	2022年	3月	14日	ホテルグランヴィア京都

2. 理事会の開催

第121回理事会	2021年	4月	23日	(決議の省略)
第122回理事会	2021年	5月	28日	(決議の省略)
第123回理事会	2021年	6月	30日	(決議の省略)
第124回理事会	2021年	9月	17日	(決議の省略)
第125回理事会	2021年	12月	17日	国際高等研究所
第126回理事会	2022年	3月	3日	国際高等研究所

『2』資産運用の取り組み

2021年度には下記のとおり、発行体による買取および期日前償還により合計552,990千円が償還された。

日付	銘柄	償還金額
	【発行体による買取】	千円
2021/4/30	トヨタ自動車第1回AA型種類株式	52,990
	【期日前償還】	
2021/4/7	バークレイズ銀行 EB 債(参照株式:三菱 UFJFG および NTT)	50,000
2021/4/7	バークレイズ銀行 EB 債(参照株式:コマツおよび NTT)	50,000
2021/6/22	野村ヨーロッパファイナンス EB 債 (参照株式:旭化成および KDDI)	50,000
2021/6/22	バークレイズ銀行 EB 債 (参照株式:第一生命 HD および三菱地所)	50,000
2021/6/28	大和証券 EB 債(参照株式:キャノンおよび第一生命 HD)	50,000
2021/6/29	バークレイズ銀行 EB 債 (参照株式:三菱ケミカル HD および三菱 UFJFG)	50,000
2021/6/29	三菱 UFJ 証券 HD EB 債 (参照株式:オリックスおよび第一生命 HD)	50,000
2021/9/28	BNP パリバ・インシュアランス・B.V. EB 債 (参照株式:旭化成および第一生命 HD)	50,000
2021/12/13	仕組債(カイルミテッドシリーズ 70079)	100,000
	合計	552,990

また、2021 年 3 月には下記のとおり、期日前償還が合計 200,000 千円あり再運用は 2021 年度に持ち越された。

日付	銘柄	償還金額
	【期日前償還】	千円
2021/3/22	モルガン・スタンレー EB 債(参照株式:オリックスおよび NTT)	50,000
2021/3/22	UBS 銀行 EB 債(参照株式:三菱ケミカル HD および NTT)	50,000
2021/3/23	UBS 銀行 EB 債(参照株式:KDDI および NTT)	50,000
2021/3/29	バークレイズ EB 債(参照株式:第一生命 HD および KDDI)	50,000
	2022 年 3 月分計	200,000

償還金額 752,990 千円および手元預金の約 25,000 千円の運用方法について、資産運用委員会において審議した結果、下記のとおり、社債および EB 債合計 778,253 千円を購入した。

日付	銘柄	購入金額
		千円
2021/6/11	SMBC 日興証券 EB 債(参照株式:本田技研工業)	50,000
2021/6/11	SMBC 日興証券 EB 債(参照株式:NTT および KDDI)	50,000
2021/6/17	みずほ証券 EB 債(参照株式:オリックス)	50,000

2021/6/17	みずほ証券 EB 債(参照株式:三井住友 FG)	50,000
2021/6/15	BNP パリバ・イシュアンス・B.V. EB 債(参照株式:キリン HD)	50,000
2021/6/15	パークレイズ 銀行 EB 債(参照株式:KDDI)	50,000
2021/6/18	BNP パリバ・イシュアンス・B.V. EB 債 (参照株式:NTT およびトヨタ自動車)	50,000
2021/8/24	コーラル・マン・サックス・インターナショナル EB 債(参照株式:NTT)	50,000
2021/8/27	みずほ証券 EB 債(参照株式:KDDI)	50,000
2021/8/27	大和証券 EB 債(参照株式:三菱ケミカル HD)	50,000
2021/8/27	BNP パリバ・イシュアンス・B.V. EB 債(参照株式:日本精工)	50,000
2021/8/27	BNP パリバ・イシュアンス・B.V. EB 債(参照株式:INPEX)	50,000
2021/9/29	ソフトバンクグループ 第 3 回無担保社債(劣後特約付)	70,000
2022/3/16	日本生命保険特約付期限付劣後債	108,253
	合計	778,253

『3』 施設工事・修繕工事の実施

2021 年度に予定していた外灯設置工事などを、半導体不足による部品調達の遅れから次年度に持ち越し、大規模な整備工事を実施しなかったため、設備等の年間保守契約費を含む修繕費用は 4,958 千円、前年度比 278 千円の減少となった。

V. 2021 年度（令和 3 年度）収支決算

『1』 貸借対照表

(1) 資産の部

①流動資産

現預金は繰越金 33,302 千円を含めて 39,668 千円、前年度比 27,353 千円の増加となった。

②基本財産

寄付された株式の株価が、ウクライナ情勢の影響などにより 60 百万円以上も下落したため、基本財産は 3,398 百万円、前年度比 38 百万円の減少となった。

③特定資産

特別研究基金資産から 5,690 千円を医療関連の研究事業費用に充当した。

④その他固定資産

減価償却などにより、合計額は 1,205 百万円、前年度比 56 百万円の減少となった。

⑤資産合計

上記①～④の結果、合計額は 4,775 百万円、前年度比 72 百万円の減少となった。

(2) 正味財産

①指定正味財産

基本財産の減少額 ((1)②寄付株式の株価下落など) と特定資産の減少額 ((1)③研究事業費用への充当) の合計額 43 百万円が減少し、3,525 百万円となった。

②一般正味財産

流動資産の増加額（(1)①繰越金など）とその他固定資産の減少額（(1)④減価償却など）の合計額 27 百万円が減少し、1,230 百万円となった。

（３）負債及び正味財産合計

合計額は 4,775 百万円。前年度比 72 百万円の減少となり、資産合計額と一致した。

『２』正味財産増減計算書

（１）経常利益

資産運用益は 98,043 千円、前年度比 3,446 千円の減少となった。次に、補助金・助成金は、2021 年度から三菱みらい育成財団の助成金 6,280 千円の交付を受けた他合計額 7,482 千円、前年度比 6,632 千円の増加となった。また、研究事業推進基金から収益への振替はなかった。

この結果、経常収益合計額は 134,095 千円、前年度比 64,323 千円の減少となった。

（２）経常費用

コロナ禍における研究会・セミナーなどの中止により。印刷費、委託費などが減少し、経常費用合計額は 162,673 千円、前年度比 5,204 千円の減少となった。

（３）当期経常増減額

2021 年度の経常増減額はマイナス 28,577 千円となった。ただし、減価償却費などを除いたキャッシュフロー収支額は 25,935 千円となり、2020 年度からの繰越額 7,367 千円と合わせた 2022 年度への繰越金合計額は 33,302 千円となった。

以上

付属明細書 1

公益財団法人国際高等研究所
2021 年度（令和 3 年度）事業活動の展開
研究事業活動

I. 基幹プログラム	1
1. 変化の時代に“何を研究するかを研究する”方法の予備的探索	1
2. なぜ今「脱炭素」のうねりなのか	2
3. 教育を基軸とした住民参加型地域振興	3
4. 英語版成果報告書の公開	5
II. 研究企画推進会議	6

※本資料の所属・役職は 2022 年 4 月 1 日現在のものである。

I. 基幹プログラム

1. 変化の時代に“何を研究するかを研究する”方法の予備的探索

— 学問知識のメタ分析とデザイン —

(1) 趣旨

SDGs とパンデミックの時代を迎えて、高等研の理念「人類の未来と幸福のために何を研究するかを研究する」を再考し、学問知識のメタ分析とデザインの場を実践し、ネットワーク形成を試みる。

1) 学問知識の認識方法の考察

Knowledge Synthesis（知の統合・構造化：ISC 国際学術会議と INGSA 国際科学助言者ネットワークが共同で提唱）、Transdisciplinary（学際共創（学問分野の学際性に加えて多様な関与者の参画）：OECD の定義）、総合知（第6期科学技術・イノベーション基本計画で提唱）は、SDGs と新型コロナウイルス感染症を契機に注目されている新しい研究方法や概念である。このような世界的学術動向の中で、高等研の設立当初からの「何を研究するかを Beyond Boundaries で議論する場」という特徴がどのように位置づけられるのか、学問知識の認識の構造と方法の変化について予備的な考察を行う。

2) 「何を研究するかを研究する」土壌の検討

「何を研究するかを研究する」方法と環境について、多様な研究者が集い合宿形式で議論を行う。その際、関連する内外の研究・活動事例の 5W1H（when, where, who, why, what, how）について情報収集し、時代背景、当時の学問の蓄積と方向、問題点、人的繋がり、支援・資金、研究教育環境などを整理し、議論の基礎情報とする。また、議論の場の発信の仕組みを検討し試行する。

(2) 研究組織

【研究代表者】

有本 建男	国際高等研究所チーフリサーチフェロー 政策研究大学院大学客員教授 科学技術振興機構研究開発戦略センター上席フェロー
-------	---

【研究参加者】

駒井 章治	東京国際工科専門職大学工科学部情報工学科教授
宮野 公樹	京都大学学際融合教育研究推進センター准教授
土田 亮	京都大学大学院総合生存学館（思修館）5 年（博士 3 年）
渡辺 彩加	京都大学大学院総合生存学館（思修館）5 年（博士 3 年）

(3) 研究会開催

学問知識のメタ分析とデザインの場の実践に向け、「何を研究するかを研究する」方法と環境、その具体化について検討した。

※全会オンライン併用

第 1 回：2021 年 12 月 12 日

第 2 回：2022 年 01 月 17 日

第 3 回：2022 年 03 月 13 日

第 4 回：2022 年 03 月 24 日

2. なぜ今「脱炭素」のうねりなのか

(1) 趣旨

国内外において、ここ数年「脱炭素」のうねりが押し寄せている。1988年のトロント・サミットで大気中の二酸化炭素濃度の上昇がもたらす気候変動（地球温暖化）問題が初めて採り上げられ、92年のリオデジャネイロ地球サミットで国連気候変動枠組み条約が採択された。同条約の第3回締約国会議(COP3)が97年に京都で開催され、温室効果ガス排出削減を先進国にのみ義務付ける京都議定書が採択された。2015年に採択されたパリ協定は、産業革命以降の気温上昇を2℃（できれば1.5℃）未満に抑えるべく全ての国々に二酸化炭素排出削減目標の設定を義務付け、2021年のCOP26では脱化石燃料へ向けて一定の国際的合意が形成された。

欧州各国においては、1990年代から気候変動緩和策の優先度が高く、経済至上主義的な見解を表立って吐露する向きは皆無に等しかった。2016年11月4日にパリ協定が発効したのを契機として、中国や日本をはじめとする東アジア諸国にも欧州の価値観が浸透し始め、環境より経済を優先することに異論を唱えることは、タブー視されるようになった。こうした価値規範のパラダイム・シフトはなぜ起こったのか。

本基幹プログラムでは、脱炭素の世界的うねりの背景を考察し、脱炭素化文明社会の在り様について論じる。また、わが国のエネルギー環境政策に係るパラダイム・シフトの構造を明らかにした上で、その持続可能性を探る。次いで、そうしたパラダイム・シフトの社会経済的インパクトを明らかにし、今後を展望する。その際、歴史主義的考察、政治経済学的考察、社会学的考察、技術開発予測等を踏まえ、整合性ある解釈と展望を描く。

(2) 研究組織

【研究代表者】

佐和 隆光 国際高等研究所チーフリサーチフェロー

【研究参加者】

一方井 誠治	武蔵野大学名誉教授、京都大学特任教授
江守 正多	東京大学未来ビジョン研究センター教授 国立環境研究所地球システム領域上級主席研究員
開沼 博	東京大学大学院情報学環・学際情報学府准教授
加納 圭	滋賀大学教育学系教授
亀山 康子	国立環境研究所社会システム領域上級主席研究員
斎藤 幸平	東京大学大学院総合文化研究科准教授

(3) 研究会開催

※全会オンライン併用

第1回：2021年12月03日

【話題提供】 佐和隆光「なぜ今『脱炭素』のうねりなのか」

第2回：2022年02月09日

【話題提供】 江守正多「『グリーン成長』の次のパラダイムは何か」

第3回：2022年03月29日

【話題提供】 斎藤幸平「気候危機と脱成長」

3. 教育を基軸とした住民参加型地域振興

けいはんな学研都市は、街びらきから 30 余年の間に、約 150 の研究機関や大学、文化施設が設置され、道路や公共交通機関の整備が進み、人口も増加した。これからの 30 年は、ハード面の充実に加え、人々の新たな関係性の構築や幸福感の醸成といったソフト面での充実も重要になるであろう。本研究は教育を基軸とし、住民参加型の手法も活用しながら、この地域が国際教育都市として発展する方向——「けいはんな学研都市地域を軸とした教育システム輸出拠点の形成」と、身心の健康維持促進の実践の場となる方向——「けいはんな学研都市地域の振興に向けた具体的試み—ヘルスリテラシー向上を通して—」の二つを追究し、けいはんな学研都市地域の振興に貢献することを目指す。

<1> けいはんな学研都市地域を軸とした教育システム輸出拠点の形成

(2018 年度からの継続課題)

(1) 趣旨

けいはんな学研都市地域は、有数の高等教育機関と研究所群が集積し、教育産業拠点としての潜在力と優位性を持つ。また、途上国から関心の高い特別教育活動は、日本の文化的土壌と不可分であるため、この地域が、京都、奈良、大阪という日本の歴史、伝統、文化が根付く地であるということも利点となる。このようなけいはんな学研都市地域は、日本型教育システムの海外展開拠点となり、更には欧米大学の東アジア拠点として中継貿易基地となる未来像も考えられる。本研究では、教育中継貿易の世界的動向、日本型教育の海外展開における条件、途上国対象の日本型教育指導者養成センター設置の条件等に関する調査研究を踏まえ、けいはんな学研都市地域を軸とした教育システム輸出拠点の形成に向けた今後の課題と方策を考察する。

(2) 研究組織

【研究代表者】

高見 茂	国際高等研究所チーフリサーチフェロー 京都光華女子大学学長 京都大学学際融合教育研究推進センター特任教授
------	--

【研究参加者】

郭 暁	博神戸松蔭女子学院大学教育学部講師
島田健太郎	創価大学教育学部講師
白銀 研五	びわこ学院大学教育福祉学部准教授
杉本 均	京都大学大学院教育学研究科教授
全 京和	京都光華女子大学こども教育学部准教授
谷本 寛文	京都光華女子大学こども教育学部准教授
智原 江美	京都光華女子大学こども教育学部教授
中島 悠介	大阪大谷大学教育学部准教授
長久 善樹	啓明学院社会科教諭
南部 広孝	京都大学大学院教育学研究科教授
西川 潤	京都光華女子大学健康科学部講師
服部 憲児	京都大学大学院教育学研究科准教授

福田	一	啓明学院英語科教諭
松本	圭将	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程
宮村	裕子	畿央大学教育学部准教授
廖	于晴	大阪大谷大学教育学部教育学科特任講師
山田	基靖	学校法人摺河学園学園長
渡辺	雅幸	びわこ学院大学教育福祉学部准教授

(3) 研究会開催

本研究は 2020 年度に日英報告書を発行している。2021 年度は、これまでの研究成果に基づく実践状況を共有、確認し、本研究を締め括った。

※全会オンライン

第 1 回：2021 年 06 月 05 日

第 2 回：2021 年 11 月 06 日

<2> けいはんな学研都市地域の振興に向けた具体的試み

—ヘルスリテラシー向上を通して— (第 2 期)

(1) 趣旨

けいはんな学研都市地域は、研究開発、産業、自然、歴史、文化、農業、食等の資源が隣接・集積する。この特徴を生かし、健康を創出促進する好循環モデルを形成することが、本研究の目指すところである。第 1 期は 2019 年 9 月に発足、2021 年 7 月に報告書を発行した。第 1 期においては、ヘルスリテラシーの概念と学術的動向の把握、ヘルスリテラシーの汎用、必要性、測定手法、社会的意義の検討、けいはんな学研都市地域のヘルスリテラシーに係る活動の調査を行った。これらを踏まえ第 2 期では、当該地域での社会実装を意識し、ヘルスリテラシー向上策を提案する。

1) 学研都市地域住民を対象とするヘルスリテラシー測定枠組みの策定

ヘルスリテラシーの学術的定義は「健康情報を取得、理解し、評価、活用する能力」とされる。信頼できる健康情報の提供という社会側の課題もあるが、ここでは個人のヘルスリテラシーの実態を把握するための測定枠組みを策定する。具体的な調査対象住民の抽出等についても検討する。

2) ヘルスリテラシー向上の行動変容促進手段の探索

ヘルスリテラシーにおいては自律した意思決定能力が要とされるが、それは意識の変化や行動変容までを範疇にしているからである。そこで、行動変容促進手法の探索と試行を行い、学研都市地域住民の生涯学習制度を通じたヘルスリテラシー向上策を検討する。

3) 教育課程への総合的な健康教育導入の手立ての探索・モデルカリキュラムの検討

2022 年度より高等学校学習指導要領が改訂、「総合的な探究の時間」が新設され、生徒の主体性や情報収集・分析能力を重視した横断的、総合的な学習領域が導入される。このような動きの中に、ヘルスリテラシー向上に資する「総合的な健康教育」の入れ込みが可能か、どのように入れ込むことができるか。学研都市圏の教育委員会、小学校、中学校、高等学校との共同研究により探索し、モデルカリキュラムの策定を試みる。

(2) 研究組織

【研究代表者】

高見 茂 国際高等研究所チーフリサーチフェロー、
京都光華女子大学学長
京都大学学際融合教育研究推進センター特任教授

【研究参加者】

有山 将人 生駒市都市整備部都市計画課長
池田 一也 京田辺市企画政策部長
大原 真仁 精華町総務部企画調整課長
角井 力 奈良市都市整備部都市計画課長
加藤 博和 名古屋大学大学院環境学研究科教授
川上 浩司 京都大学大学院医学研究科教授
坂野 寿和 株式会社国際電気通信基礎技術研究所(ATR)波動工学研究所所長
坂本 悟 奈良県県土マネジメント部地域デザイン推進局県土利用政策室長
重松 千昭 元公益財団法人関西文化学術研究都市推進機構参与
島田 和幸 京都府府民環境部地球温暖化対策課長
寺崎 肇 元関西文化学術研究都市推進機構
ヘルスケア事業推進室プロジェクトディレクター
中村 佳正 大阪成蹊大学副学長・教授
檜 孝寿 株式会社京都総合経済研究所取締役調査部長
山口 一成 木津川市マチオモイ部学研企画課長
納谷 太 NTT コミュニケーション科学基礎研究所所長

(3) 研究会開催

報告書の内容に係る議論、及び第 2 期における活動の具体化に係る議論をメールにて行った。

(4) 報告書

「けいはんな学研都市地域の振興に向けた具体的試み ―ヘルスリテラシー向上を通して―」(第 1 期報告書) (和文 2021 年 07 月発行)

4. 英語版成果報告書の公開

2020年度まで実施の基幹プログラムの英語版報告書を2021年3月に作成、2021年4月に公開した。

1) 報告書「SDGs とコロナパンデミックの時代における科学技術のあり方を考える」

Considering Science and Technology in the Age of SDGs and COVID-19 Pandemic

(和文 2020 年 10 月、英文 2021 年 3 月)

2) 報告書「第 4 次産業革命への適応～社会経済システムの再編成～」

Adaptation to the Fourth Industrial Revolution

– Reorganization of the Socioeconomic System –

(和文 2020 年 9 月、英文 2021 年 3 月)

3) 報告書「教育システム輸出入拠点の形成

～国際教育都市「けいはんな」の可能性を探る～」

Creating a Hub for Import / Export of the Educational System

– Exploring the Possibility of Keihanna, an International Educational City –

(和文 2020 年 9 月、英文 2021 年 3 月)

Ⅱ. 研究企画推進会議

(1) 目的

研究活動に係る諸課題に関する所長の諮問に応じた検討、所長への建議あるいは助言・提案、研究事業の企画及び円滑な推進を図るために必要な事項を検討する。

(2) 委員

2015 年度に発足、一期 2 年、2021 年度に第四期を迎えた。2020 年度末で任期を終える委員の再任を含め、2021 年度に新たな期を発足した。人文学、社会科学、自然科学等、幅広い学問領域の学識経験者を委員とする。

【委員】

榎 裕之	国立大学法人奈良国立大学機構理事長 学校法人トヨタ学園フェロー 豊田工業大学名誉学長 東京大学名誉教授<議長>
稲賀 繁美	京都精華大学国際文化学部教授
小寺 秀俊	OECD 科学技術委員会日本代表・副議長 京都大学名誉教授・特定教授
高橋 義人	平安女学院大学国際観光学部特任教授 京都大学名誉教授
中村 道治	科学技術振興機構名誉理事長
西尾章治郎	大阪大学総長
吉川左紀子	京都芸術大学学長・同大学文明哲学研究所所長 京都大学フィールド科学教育研究センター特任教授 京都大学名誉教授

(3) 会議開催

新型コロナウイルス感染症の影響により、対面での議論を重視する本会議は開催を見送った。

以上

付属明細書 2

公益財団法人国際高等研究所
2021 年度（令和 3 年度）事業活動の展開
交流事業活動

<u>I. 『集合知ネットワーク』（きづ会議）構築プロジェクト</u>	<u>2</u>
<u>II. 『エジソンの会』</u>	<u>4</u>
<u>III. けいはんな哲学カフェ『ゲーテの会』</u>	<u>6</u>
<u>IV. IAS 塾『ジュニアセミナー』</u>	<u>10</u>

『集合知ネットワーク』（きづ会議）構築プロジェクト」

（１）目的

21 世紀となり、新型コロナウイルス感染症や降雨災害、震災、ウクライナ侵攻など、世界各国において予想できないような事象が絶え間ない形で起こり続けてきている。IT 技術の発達に伴い、社会の多様化も極度に進み、社会の在り方の変化のスピードもヒトの脳力を超えたものとなっている。こういった現状を踏まえ、質の高い情報を、スピード感を持って活用していくために、常に様々な事象に対して積極的態で議論し、思考しておくことにより「構え」をとっておくことが有用である。本活動は「何を研究するかを研究する」研究所として行うべき活動を行い、近い将来国際高等研究所が執るべき活動の在り方を示すことを目的とする。

（２）研究会開催（日時 場所：テーマ）

通算回数	開催日	会議方式	テーマ及び基調報告
20	2021.4.27	オンライン	国際関係法
21	2021.5.25	オンライン	触覚
22	2021.6.29	オンライン	AI 倫理
23	2021.9.7	オンライン	植物の化学情報
24	2021.10.5	オンライン	メディアとアカデミア
25	2021.11.2	オンライン	離島でのアート活動
26	2021.12.7	オンライン	市民が研究する場
27	2022.1.11	オンライン	科学と政治
28	2022.2.1	オンライン	知と社会をつなげる
29	2022.3.1	オンライン	公共政治

（３）研究組織

【研究代表者】

駒井 章治 東京国際工科専門職大学工科学部情報工学科教授
国際高等研究所客員研究員

【研究参加者】

宮野 公樹 京都大学学際融合教育研究推進センター准教授
国際高等研究所客員研究員

杉谷 和哉 岩手県立大学総合政策学部講師
国際高等研究所特任研究員

井出 和希 大阪大学感染症総合教育研究拠点特任准教授

中村 征樹 大阪大学全学教育推進機構教授

定藤 博子 摂南大学経済学部准教授

久木田水生 名古屋大学大学院情報科学研究科准教授

安藤 悠太 京都大学大学院地球環境学堂 特定研究員
阪井 英隆 パナソニック株式会社
森本 智史 慶應義塾大学先導研究センター特任助教
田島 知之 京都大学宇宙総合学研究ユニット特定助教
梅若 基徳 能楽師
五十嵐涼介 株式会社AaaS Bridge

【ゲスト】

- 第20回（2021.4） 竹村 仁美氏（一橋大学法学研究科国際・公共政策研究部）
第21回（2021.5） 田中 由浩氏（名古屋工業大学 ロボティクスラボ）
第22回（2021.6） 久木田水生氏（名古屋大学大学院情報学研究科
社会情報学専攻情報哲学講座）
第23回（2021.9） 塩尻かおり氏（龍谷大学農学部植物生命科学科
化学生態学研究室）
第24回（2021.10） 中谷 日出氏（東京国際工科専門職大学工科学部
デジタルエンターテインメント学科教授/京都大学思修館特任教授）
第25回（2021.11） 池永 朱里氏（アーティスト）
第26回（2021.12） 森田 泰暢氏（福岡大学商学部）
第27回（2022.1） 津村 啓介氏（前衆議院議員）
第28回（2022.2） 五十嵐涼介氏（株式会社AaaS Bridge）
第29回（2022.3） 杉谷 和哉氏（岩手県立大学 総合政策学部）

「エジソンの会」

エジソンの会は、けいはんな学研都市が標榜する「立地機関間の連携とそれによる成果の創出」を促進するために、高等研が知的ハブとしての役割を果たし、立地機関の研究者や技術者のコミュニティを形成し、具体的な「オープンイノベーション」の成功事例の確立に寄与することを目的として発足したものである。2021 年度も昨年度に引き続きオープンセミナーの開催を重点的に事業展開した。

【オープンセミナー】

(1) 第 37 回：11 月 19 日（金）国際高等研究所レクチャーホール

主テーマ：「バイオサイエンスが切り拓く未来」

バイオサイエンスは、20 世紀後半から展開された細胞融合技術や遺伝子組み換え技術などの開発以降、革新的な成長を遂げ、人類の生存に役立つ多くの可能性を秘めた、今もっとも注目されている研究分野であり、私たちが直面している「食糧危機」、「エネルギー問題」、「地球環境問題」、「食の安全」などの社会課題を解決の方向に導く壮大で広範な研究領域である。

第 37 回会合では、「Think Hybrid」を提唱し、バイオサイエンス領域を牽引して世界からもっとも注目を集めている竹内昌治氏より、分野を超えた新たな領域での新しいモノ創りについてご説明頂いた。また、細胞農業の先駆的ベンチャー企業であり、世界のニュープロテイン市場のトップランナーである川島一公氏より、細胞の画期的な培養技術を通じた食の展望と未来における可能性についてご説明頂いた。

講演：「バイオハイブリッドによる挑戦

～ロボット、センサ、培養肉、人工細胞、マイクロ流体デバイス～

講師：竹内 昌治氏 東京大学大学院情報理工学系研究科知能機械情報学専攻教授

講演：「培養細胞により世界を変える ～体を模倣した革新的培養技術～」

講師：川島 一公氏 インテグリカルチャー株式会社 取締役 CTO

インタラクティブ・セッション：上田修功氏（エジソンの会スーパーバイザー）

バイオサイエンスの領域での国際競争力とドライビングフォース、大量培養へのスケールアップと細胞密度の関係、細胞農業と畜産農家の将来、バイオ肉と食の安心・安全、人間拡張と倫理、研究への取り組みとパブリックアクセプタンス、iPS 細胞の分化・癌化と細胞培養についての懸念、細胞の劣化と不老不死の可能性など、多岐にわたる視点で質疑応答がなされた。

参加者：22 機関 38 名

(2) 第 38 回：2022 年 3 月 2 日（水）国際高等研究所レクチャーホール

主テーマ：『人と機械の未来 ～ムーンショット型研究開発によるアプローチ～』

今、我が国は超高齢化や大規模自然災害、地球温暖化問題など、様々な困難な課題に直面している。こうした課題に対し、「Human Well-being（人々の幸福）」を目指し、その基盤となる社会・環境・経済の諸課題を解決するために、破壊的イノベーションの創出、従来の延長にない、より大胆な発想に基づく挑戦的な研究開発制度（ムーンショット型研究開発）が創設された。

第 38 回会合では、ロボット工学の世界的権威であり、世界のロボット研究を牽引され、昨年 IEEE 会長を務められた福田敏男氏より、ムーンショット型研究開発の概要と、そこで取り組まれている「自ら学習・行動し、人と共生するロボットの実現」についてご紹介頂いた。また、先進的なサイボーグ技術を基に多くの企業・機関との実証実験を積極的に行っている注目のベンチャー企業で、2018 年に Forbes より世界の注目すべきアジアの 30 人に選出されたメルティン MMI 社の粕谷昌宏氏より、医療と工学の融合による最先端ロボティクス技術とその取り組みについてお話頂いた。

講演：「ムーンショット型研究開発によるアプローチ

～自ら学習・行動し、人と共生するロボットの実現に向けて～」

講師：福田 敏男氏 名古屋大学名誉教授、名城大学教授 早稲田大学特命教授

講演：「身体と機械の融合による人類の可能性の最大化」

講師：粕谷 昌宏氏 株式会社メルティン MMI 代表取締役

インタラクティブ・セッション：上田修功氏（エジソンの会スーパーバイザー）

人間と機械の役割の今後の推移について、アクチュエータとしてのバイオ技術の利用、身体が多関節構造からくる人間の制約とそこからの解放、学术界と日本の教育システム、起業家精神と若者のモチベーション、国際競争力と軍事産業、研究開発におけるトランスサイエンスの重要性、働き方改革の問題点など、参加者から多くの質問やご意見を頂き、多岐にわたる視点から登壇者との活発な質疑応答がなされた。

参加者：24 機関 36 名

「けいはんな哲学カフェ『ゲーテの会』」

国際高等研究所の知的資源と人的ネットワークを活用して、知的連携の促進とそのため
の土壌醸成を図ることを目的として、「満月の夜開くけいはんな哲学カフェ“ゲーテの
会”」を2013年度に立ち上げ、原則として毎月の満月の夜に公開セミナーを企画・開催し
て2021年度末までに90回の開催実績を重ねるに至っており、高等研が関西文化学術研究
都市の中核機関として、相互の連携や知的活動、さらには参加者相互の人脈構築や交流
の中心的役割を担うという「知的ハブ」機能を果たせるものに育て上げてきたと考えて
いる。

2年間を一つのステージをして捉えて企画しており、2013年度からの第1ステージは
「経済至上主義、科学技術至上主義からの脱却を求めて」、2015年度からの第2ステー
ジは「日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて」、2017年度からの第3ステージは「未
来に向かう人類の英知を探る」であった。2019年度からの第4ステージでは、『次代を
見据え、東西の架け橋たらんとした先覚者』の思想と行動を尋ねる、あるいは『日本と世
界の歴史の転換点で転轍機を動かした先覚者』の事跡を辿り、『新しい文明』の萌芽を探
る。」と題した新規展開を図っている。

2021年度はコロナ禍での新しい運営方式として、webinar を利用したライブ配信に
より、講演に加えて双方向の質疑応答を実現し、6回の会合を開催した。感染状況を鑑み
ながら、第89回からはオンライン参加・会場参加のハイブリッド開催として、講師と対
面での質疑応答も行った。延べ226名の参加者を得て、1回当たりでは平均37名の参加
者となり、オンラインでの参加も定着してきた。

(1) 第85回：5月26日（水）オンライン開催

分野：思想・文学分野

講演：日本人の実像を求めて旅した民族学の祖「柳田国男」

講師：鶴見 太郎 早稲田大学文学部教授

講演概要：現代では、柳田国男の民俗学はしばしば日本民俗学と同義に捉えられるこ
とが多い。それは一体何に起因するものなのだろうか。少なくともその理由の一
端は、柳田の安定した循環構造を持つ神観念と、地方の郷土史家を連ねるよう
にして形成された研究組織網に求められるとあっていい。加えて柳田によって論じ
られる素材は多くの読者にとって、そうした事例は自分の身の回りにも起こり得
ると受け止められ、追体験への道を開くものでもあった。その意味で折口信夫の
直観力、南方熊楠の博覧強記にみられるような、読者を圧倒する世界は柳田の採
るところではなかったといえる。本報告では大正末から昭和初年にかけて柳田の
民俗学がどのような形で地方へと浸透していったか、その実像について考えて行
きたい。

参加者：オンライン 49名

(2) 第 86 回：6 月 25 日（金）オンライン開催

分野：科学・技術分野

講演：フロイトと並ぶ深層心理学の開拓者「ユング」

講師：森谷 寛之 京都文京大学名誉教授

講演概要：心理学は自分の精神と直接関係する身近な学問でありながら、その成立は非常に遅れた。16, 17 世紀に由来する近代諸科学（物理学, 解剖学, 化学, 生物学など）の誕生後、ようやく 19 世紀後半から 20 世紀になって登場する。人類には盲点となる難問で、誤解されることが多い。その成立にはフロイトやユングの功績が多大である。日本への紹介も遅れ、ようやく臨床心理士（1988/民間資格）や公認心理師（2018/国家資格）という＜新しい職種＞が生まれた。本会では 2020 年 8 月にまずフロイトが取り上げられた。

最初に心理学（実験心理学・臨床心理学）とは何か、他諸科学との視点、発想の本質的な違いを説明し、位置づける。そしてフロイトと対比しながらユングの果たした役割を解説する。ユングの「内向-外向」はすでに日常語となっているが、その真意は伝わっていない。フロイト以上に無意識の世界を重視した。その業績紹介はまだ途上にあるといえる。

参加者：オンライン 51 名

(3) 第 87 回：7 月 20 日（火）オンライン開催

分野：思想・文学分野

講演：「伊藤整」の西欧文学文化受容の姿勢

講師：澤井 繁男 作家、元関西大学文学部教授

講演概要：伊藤整は昭和初期『新心理主義文学』を日本にいち早く紹介し、みずからも実験的作品を書き、川端康成から評価される。だが、その後自然主義的傾向の作品に後退する。戦後は「伊藤整理論」を確立して、戦前から批評の対象としてきた「私小説」を総括する、小説では『鳴海仙吉』、評論では同時進行で『小説の方法』を発表する。彼はつねに「生命と秩序」の相克に目を向けて、そのもとに「エゴ」の問題を見据え、さらに作家や画家などの芸術家が「愛情乞食」だと明言するにいたる。そこに及ぶまでには、北海道出身の彼が自分をどう位置づけて、西欧文学の移入に努めてきたか。今回の講演では、以上の問題を整理しながら、多方面で第一級の仕事をした、1970 年度ノーベル文学賞の候補に挙がっていた伊藤整の文学を総論的に捉えてみたい。

参加者：オンライン 32 名

(4) 第 88 回：9 月 16 日（木）オンライン開催

分野：思想・文学分野

講演：手塚治虫と「メタモルフォーゼ」

—『ファウスト』『メトロポリス』から「人工生命体」への地平へ—

講師：村瀬 学 同志社女子大学名誉教授

講演概要：もし仮に、手塚治虫の代表作を『鉄腕アトム』と『火の鳥』とすると、前者は「ロボット」マンガで、後者は変身（メタモルフォーゼ）のマンガとみなされ、そうすると「ロボット」は鋼鉄の機械で、「火の鳥」のように「変身」できないもので、二つの代表作は、およそ正反対の主人公を描いていたかのようにみられてきたと思います。でも、手塚治虫全作品の原点とも言える初期の優れた作品『メトロポリス』では、「アトム」のように空を自在に飛べる「ミッチィ」が「人工細胞」から作られた「人工生命型ロボット」としてでてきます。ここに手塚治虫特有の「人工細胞」というイメージが出てきて、それがまるで「ips 細胞」でつくる「変身（メタモルフォーゼ）するロボット」のような特殊なイメージとして発展させられてゆきます。後の『仮面ライダー』や『エヴァンゲリオン』にも通じる半生物ロボットで、ゲーテの『ファウスト』で言及される「ホムンクルス」にも通じるような「人工生命設定」です。この「変身（メタモルフォーゼ）するロボット」というイメージの現代的な広がり方について考えてゆけたらと思っています。

参加者：オンライン 42 名

(5) 第 89 回：2022 年 1 月 21 日（金）オンライン参加・会場参加並行開催

分野：思想・文学分野

講演：保田與重郎「絶対平和論」への軌跡

講師：前田 雅之 明星大学人文学部教授

講演概要：保田與重郎の戦後における重要な仕事として「絶対平和論」（1950 年）があります。そこでは、徹底的に技術を伴う近代を否定することが平和への道と説かれています。当時の論壇からは空想論として無視されましたが、なぜ保田がかかる主張を展開したのかを考えるために、一つは、戦前から「文明開化の論理の終焉について」（1939 年）等で展開されていた近代批判とそれに伴う「偉大な敗北」論、さらに、もう一つとして、保田が近代批判の一環としてとりわけ重視したゲーテ論（『エルテルは何故死んだか』、1939 年）を軸に考えて行く予定です。とりわけゲーテの読み替え（これが正しい読解は限りませんが）を通して、保田におけるポスト近代を見通してみたいと思います。

参加者：オンライン 15 名、会場 7 名

なお、この回よりオンライン申込システムを利用した参加費の徴収を試行実施した。

(6) 第 90 回：2022 年 2 月 17 日（木）オンライン参加・会場参加並行開催

分野：科学・技術分野

講演：世界的数学者にして教育者、随筆家。人間と学問の在り方を論じる「岡潔」

講師：高瀬 正仁 数学者・数学史家

講演概要：昭和 4 年（1929 年）の晩春初夏のころ、岡潔先生はフランスに留学してガストン・ジュリア先生のもとで学び、多変数解析関数論という前人未踏の曠野のような領域に生涯の課題をみいだしました。帰国して広島文理科大学に奉職しましたが、まもなく職を辞して故郷の和歌山県紀見村（現在、橋本市）にもどり、ひとり数学研究に身心を投じました。身なりをかまわずに村を歩き、ときには道端にしゃがみこんで木の枝で地面に数式を書き綴る姿には鬼気の迫るものがあり、同郷の人びとは畏敬の念を抱いたということです。日付入りの日々の研究記録が大量に遺されていて、往時の岡先生の姿を今に伝えています。岡先生はさながら故郷の野の花を摘むように数学の果実を摘み、西欧近代の数学の姿に変容を迫るほどの深遠な理論を造形しました。人生そのものと渾然と融合して展開する岡先生の学問が、今日を生きるぼくらに伝えていることを考えたいと思います。

参加者：オンライン 21 名、会場 9 名

IIAS塾「ジュニアセミナー」

(1) 2021年夏季ジュニアセミナー（第10回） ―体験型・課題探求型―

コロナ禍を考慮し、2021年春季に引き続き、オンライン方式でWEB「IIAS塾ジュニアセミナー」として開催した。

2021年4月から募集開始し、開催は2021年8月3日（火）～4日（水）として2日間に短縮して実施した。応募者数はこれまでで最も多い34人（高校生29人・大学生5人）であり、その地域もこれまでの京都、大阪、奈良、東京のほか、北海道、長野、兵庫からの新たな参加もあり、参加者の地域的拡大が更に進んだ。

運営の拡充に関しては、春季に引き続き、次の5点の取組を進めるとともに、今回は、これらに加えて、新たな試みとして、TAの協力を得て、「on-line プレミーティング」を実施し、受講生の問題意識の深耕を図り、当日のグループ討議の更なる充実を期した。

- ① 開催形態を対面方式からオンライン方式に変え、募集対象地域を関西地域から全国に広げたこと。
- ② 募集に当たって高校生ばかりでなく大学生にも参加を呼びかけ議論の多様化を期したこと。
- ③ 印刷教材のメインテキストの配布に加えて講義動画を配信し、オンデマンド学習を強調したこと。
- ④ 人物に学ぶシリーズに加えて、民主主義、原子力開発などの現代的課題を取り上げ、課題探求型プログラムを導入したこと。
- ⑤ 論理（理性）主体のグループ討議のみでなく、感性（芸術性）をも鍛える「WEB句会」を企画し、全人教育に配慮したこと。

<企画実施内容>

1) 思想・文学分野

講義：松尾芭蕉の世界を探求する。

―古池に蛙は飛びこんだか 松尾芭蕉の名句の真相（句作体験学習を含む）

講師：長谷川 櫂 俳人、朝日俳壇選者、神奈川近代文学館副館長

受講生及びTA、43人からの投句86句を対象に選句した結果を基に、長谷川先生の指導の下で「WEB句会」を行った。

2) 政治・経済分野

講義：民主主義の現代的意義を考える。

―公共政策規範としての「将来世代に対する責任」

講師：足立幸男京都大学名誉教授

足立先生の講義内容やグループ討議を通して、政治参加の権利と義務、民主主義国家と権威主義国家など、政治や国家の在り方について議論された。

3) 科学・技術分野

講義：原子力開発の過去・現在を考える。

ー日本の「原子力開発」を推進した人々の構想力

講師：山崎正勝東京工業大学名誉教授

山崎先生の講義内容やグループ討議を通して、エネルギー政策を再考する必要があるのではないかなど、自らの未来を見据えた真剣な議論が交わされた。

(2) 2022 年春季ジュニアセミナー（第 11 回）ー人物学習型ー

コロナ禍を考慮し、2021 年夏季に引き続き、オンライン方式で WEB「IIAS 塾ジュニアセミナー」として開催した。

2021 年 11 月から募集開始し、開催日程を 2022 年 3 月 26 日（土）～28 日（月）の 3 日間で実施した。学習テーマは「人物学習型」とし、「九鬼周造」「吉野作造」「司馬江漢」を取り上げ、「文化」創造を中心モチーフとして学んでいただくこととした。応募者数は、20 人（高校生 15 人・大学生 5 人）で、その地域は、これまでの京都、大阪、奈良、兵庫、東京、北海道などに加え、新たに岩手からの参加もあり、地域的拡大が更に進んだ。また大学生の参加も引き続き 1 グループを形成する規模であり、本セミナーの新たな展望を開くものとなると思われる。

運営の拡充に関しては、昨年に引き続き、次の諸点について取組を進めるとともに、今回は、これらに加え、開催日程を 2 日から 3 日に 1 日延長し、討議時間を十分保証することとし、当日のグループ討議の更なる充実を期した。

- ① 開催形態に引き続きオンライン方式を採用し、募集対象地域を関西地域から全国に広げたこと。
- ② 募集に当たって、高校生のほか大学生にも参加を呼びかけ、継続的な学習機会を提供したこと。
- ③ 印刷教材のメインテキストの配布に加えて講義動画を配信しオンデマンド学習を称揚したこと。

<企画実施内容>

1) 思想・文学分野

講義：九鬼周造に学ぶ～現代に息づく伝統的美意識としての「いき」～

講師：藤田正勝京都大学名誉教授

受講生自らが有する「いき」の感覚に関して、言葉としては理解できても、その実態がつかめているか覚束ないものと捉え、「いき」とは、目的を持たないそれ自体を楽しむ（自律的遊戯）を本質とするなど、「いき」を巡って、その探究が続いた。

2) 政治・経済分野

講義：吉野作造に学ぶ～先陣を切る者は、歴史に学び、その光と影を縁（よすが）とする～

講師：奈良岡聡智京都大学法学部法学研究科教授

現代は、以前にも増して「情報」が重要になってきており、国民の認識として

の「情報」が自由と民主主義を保証する上で欠かせない要素となっている。ネット空間は国家統制の及ばないアナーキーな存在であるが、集合知の働く場として有用である。歴史を学ぶことは、多様なアイデンティティを有する人間にとって生きることと同義である。歴史的事実は、その背後の人間の強烈な意志と感性の存在が意味のあるものとして資料化され叙述されたものに他ならないなど、現下の世界情勢をも踏まえて歴史認識に関わった白熱した議論が交わされた。

3) 科学・技術分野

講義：司馬江漢に学ぶ～「文化」を創造する好奇心が豊かな人間に！～

講師：池内了総合研究大学院大学名誉教授

近代科学技術の発展に関する西洋東洋の違いの要因についてや、理系と文系の思考の違いに関連して、前者が依拠する合理性・論理性の重要性、及び後者が依拠する感性・人間知の重要性など、未来を見据えた真剣な議論が交わされた。

以 上